The Finishing School by Muriel Spark: 教師と生徒の合わせ鏡が映す現代世界

藤　井　加代子

序

今年の2006年の春、4月13日の金曜日にMuriel Sparkはこの世を去り、半世紀以上に亘る作家生活に終止符を打った。88歳であった。最初の小説*The Comforters*（1957年）が出版されたのが39歳のときで、小説家としては遅いデビューであったが、最後の小説となった2004年に出版された小説*The Finishing School*(1)を含めて22冊という多くの小説を残した。82歳になった2000年に*Aiding and Abetting*が出版されたときにも、筆者はその旺盛な創作活動に驚き、スパークの新作が読めることを喜んだ。しかし、その直後に次作も予定していて、既にタイトルも*The Finishing School*と決めていると知ったときは更に驚いた。そして、予告通り2004年に同タイトルで出版された。筆者は再び喜び、すぐにオンラインでイギリスのBlackwell書店から本を入手しようとしたが、入手不能との返事を受け取り、待機リストに載せられた。出版されたばかりで入手不可能とは不思議に思ったが、理由は不明であった。そこでその年の夏ロンドンを訪れた折りに、文学書の充実するHatcher書店で新刊を求めたが、スパークと出版社――その本はVi-king社から出版されていた――との間に問題が起き、どの書店に行ってもその新刊を入手することはできない、と主任らしき店員に言われた。その後Blackwellからは梨の礫で、先にアメリカのAmazonからやっと入手することができたが、それはDoubledayから出版されたものであった。出版社

との間にどのような問題が起きたか、一読者の私には不明であるが、最後の小説となった *The Finishing School* のなかでも、小説家と出版社の間の駆け引きや、小説家が出版社から被る葛藤が取り上げられている。

1996年刊行の *Reality and Dreams* では、スパーク馴染みのテーマが余りに図式的に取り扱われ過ぎ、その上手法にもスパークらしい知的な軽みを欠き、正直小説家として少々衰えを感じたが、その４年後の *Aiding and Abetting* は、現実にイギリスで起きた貴族による労働者階級の女性殺人事件を素材にしてフィクション化し、スパークらしい虚実綯い交ぜになった斬新な趣向の作品で、再び大いに楽しめる小説であった。スパークは小説のなかでしばしばダブル、分身を登場させてきたが、その分身のテーマは特に前作の *Aiding and Abetting* では念入りに構成され、双方とも犯罪者で指名手配中の男女二組のダブルが登場した。その二組のダブルの犯罪者間で強請や追跡が行われ、最後に殺人で指名手配中のダブルの一方であるイギリス貴族が嫌がる分身を連れて、警察の捜索を逃れアフリカまで辿り着きながら、皮肉にも分身と間違われて殺され、イギリス貴族に憧れる酋長の息子に食べられるという、 Evelyn Waugh の *Black Mischief* に類するブラック・ヒューモアたっぷりの作品であった。

I

Aiding and Abetting に登場する男女二組のダブルは、わたしたち現代人のアイデンティティの揺らぎや多重性など抽象的な形而上学的問題を笑い飛ばすかのように、ダブルの現実的利点を我欲のために利用し尽くす。その流れを受け継ぎ、最後の作品となった *The Finishing School* にも、教師 Rowland Mahler とその生徒 Chris Wiley というふたりの男性が登場するが、ふたりは合わせ鏡のように互いが互いの分身になっている。この男性同士の教師と生徒の物語は、スパーク好みの犯罪にかかわるものではなく、小説の

執筆と出版というスパークにとりもっとも身近で重要な関心事にまつわるものである。教師と生徒という、根源的に「裏切り」を内包する人間関係を設定し、「小説」をテーマに展開する物語は、いかにもスパークの自家薬籠中のものである。まず、Rowland と Chris の物語は、*The Prime of Miss Jean Brodie*（1961年）のなかの女性教師とその女生徒の物語を思い起こさせる。

スパークは教師と生徒の間に反発と同時に補完しあう、「魅力的」な女性教師 Jean Brodie と彼女の「お気に入り」の女生徒 Sandy Stranger というダブルの存在を、既に四十年以上も前に描いている。その間に長い歳月の介在があるが、*The Finishing School* と *The Prime of Miss Jean Brodie* の両者とも、学校を作品の舞台としている。David D. Robb によると、スパークは "school story" という文学ジャンルのコンヴェンションを巧みに利用して、*The Prime of Miss Jean Brodie* を描いているという。(2) 近年の *Harry Potter* シリーズの人気は、魔法使いの物語を "school story" と結合させた点にあると思うが、スパークが最後に描いた "school story"、College Sunrise の物語は、Brodie のエジンバラの女子校や Harry Potter のパブリック・スクールを模した魔法学校とは大いに趣きが異なる。本論では *The Prime of Miss Jean Brodie* やスパークのその他の小説と比較しながら、Rowland と Chris のダブルの存在が展開する物語を検討し、常に小説を現実世界のミクロコスモスと考えていたスパークが、最後の作品にどのような現実世界の縮図を描こうとしたか明らかにしたい。

Ⅱ

主人公のひとり、Rowland Mahler は現在29歳で、オックスフォード大学からリルケ研究で博士号を得て、妻 Nina の意向でブリュッセルにフィニッシング・スクール、サンライズ校を開校する。しかし彼は既に戯曲を何作

か書いていて、現在は小説を出版する野望を抱いているので、学校経営は彼にとっては二の次の事柄であり、その運営は妻任せである。Nina は学者を好み、いかにもインテリの風貌をした Rowland と結婚してみると、夫は小説の執筆に夢中で、小説家には学歴は邪魔だとせっかく取得した「博士」の称号を使おうとせず、妻としては不満である。スタッフは Rowland 夫妻とフランス語教師と秘書兼任のフランス人女性と、メイドと料理人兼任のその妹と、庭師兼用務員のイタリア人男性のみの、家内工業的な小さな教養学校である。スタッフは皆ダブル以上の役割を果たさねば、その小さな学校でさえ運営できないという厳しい現実に直面している。生徒も9人のみで、どうにか収支を合わせて存続しているという状態だが、資金繰りが苦しくなったり、その他問題が起きると引っ越して、新天地でまた再開するという身軽さで、学校の場所にはこだわりはない。この学校を Jean Brodie の学校と比較すると、Rowland のフィニッシング・スクールと現代という時代の特徴が、さらによく浮き彫りになる。

Miss Brodie が教鞭をとる女子校 Marcia Blaine School は、1930年代のエジンバラにあった。その時代と場所は、その作品の内容と緊密に関係し決定的な意味をもち、他の時代や場所と置き換えることはできない。その時代のその場所でしか、Miss Brodie と “crèm de crèm”[(3)] と呼ばれる、彼女に選ばれた特別な女子生徒、“the Brodie’s set” (9) の物語はありえない。将来の人生の基礎をつくる時期の女生徒たちが、カルヴィニズムの影響が色濃く残るエジンバラで、その多感な人生の一時期を過ごすという設定こそが、柔軟な感受性を持つ生徒を、自分好みの人間に育てあげることに喜びを見いだす教師と、その個性的な先生に心酔する生徒の物語には、不可欠なものである。そのような精神的に他人を支配することを無上の喜びとする教師の存在は、当時のファシズムに染まりつつあった時代の精神とぴったりと呼応していた。その時ヨーロッパでは、ムッソリーニやヒットラーのファシズムが台頭しつつあったのである。

政治的に不穏な時代に、カルヴィニズムの影響が強く残るエジンバラの女子校で、その影響を受けて育った教師 Brodie の、学校のカリキュラムを無視した授業や彼女の独断的な意見は、知的に秀でた生徒 Sandy Stranger の心に、先生に対する反発も育てていくことになる。そして、最終的には彼女は先生を裏切ることになる。その教師の影響を受けて、生徒たちの何人かは人生が変わってしまったことに、 Sandy は強い反発を感じたからだ。ひとりの学生は先生の後押しでスペインに行き、内乱に巻き込まれ命を落とすし、先生に対する裏切りを行った Sandy は、カルヴィニズムの対極の宗教ということで、ローマ・カトリックに改宗し、修道院に入ってしまうほどの強い影響を、先生から受けたのだった。その Marcia Blaine School に比べると、 Rowland の学校は、上述したようにご都合主義で、ブリュッセルからスイスのローザンヌ市の Ouchy へ、そこからラベンナへ移転して、更にイスタンブールへと移動することになる。観光地を転々と移り、その土地の風物を取り入れはするが、その取り組みは皮相なもので、エジンバラの文化風土が Brodie やその生徒に与えた全人格的な影響力とは、比較の対象にすらならない。

Ⅲ

では、Rowland Mahlar と妻 Nina によって運営されている教養学校とは、一体どのようなものであろうか。日本では馴染みの薄い種類の学校である。ヨーロッパでは主に良家の子女が、教養や身嗜みを身につけるため入学する学校として、スイスに多くあるという。インターネットで調べてみると、確かに故ダイアナ妃や現在のチャールズ皇太子夫人も、スイスにあるフィニッシング・スクールで学んだということが分かる。因に、インドにあるという Good Shepherd Finishing School のホームページを見てみると、その学校のモットーは、“Give us a girl and take back a lady” と明快で、それは学校の教育方針でもある。(4) 少女をこの学校に入学させれば、淑女

にしてくれるという。その宣伝文句は期せずして、Brodie の自信満々な言葉、“Give me a girl at an impressionable age, and she is mine for life.”（9）を思い出させる。こちらの謳い文句は、Brodie の強烈な個性を際立たせる。生徒に生涯に亘って影響を与えるような教師は、もう現代の学校には少ないと思うが、紹介したインドの学校も含め、学校という場所は、そもそも生徒の成長（変身）を促す場所として機能することを目指す。問題はどのように成長（変身）させるかということである。スパークの描くフィニッシング・スクール同様に、スイスの風光明媚なレマン湖の岸辺に実在するあるフィニッシング・スクールは、“young ladies” を「完璧なホステス」に育てるだけではなく、現代のニーズに応えるべく「ビジネス・ウーマン」としての教育も施すという。その学校のホームページの項目には、学年暦 “Academic calendar” が掲載されているが、それと並んで「値段表」“Price List” として、授業料の長いリストが載せられている。(5) この学校では「学費」（tuition）という言葉は使わないようだ。これらのことを含めて考えると、フィニッシング・スクールとは、いかにも諷刺作家のスパークの関心を惹きそうな組織であることが分かる。

Rowland と Nina が経営するフィニッシング・スクールであるサンライズ校は、教育界ではほとんど知られていない。その種の学校として Gabbitas などの有名な学校紹介サイトに推薦されているフィニッシング・スクールとは、比較の対象にもならないという。サンライズ校も風光明媚なスイスのレマン湖の畔にあるが、女子だけでなく男女共学である点が珍しい。ほとんど無名の学校で、資産もないために、教室やその他の施設も皆リースであり、そのため気軽に学校の場所を移動することができる。人々の話題に登るときは、せいぜいゴシップとしてであり、性のスキャンダル事件がないこと、進化したタイプの学校で、ボヘミアン的で悪くはない、と語られる。生徒の吸っているドラッグも、他の学校の生徒のものとは少し違うようだとも言われている。サンライズという景気の良い校名とは裏腹に、

経営は低迷状態にある。生徒は17歳迄の若者9人しかいない。既に述べたように、“free and mobile”（137）がその学校の特徴であるという点が、特に現代にマッチしている点である。“mobile phone”が現代生活の利器であるように、“mobile school”とは如何にも現代にマッチした学校に思われる。しかし実態は、可動性の高さは運営者の勝手な都合によるもので、学生側に利点があるとは思えない。要するに、軽佻浮薄な現代を象徴するような学校といえる。世間ではこの移動する学校を、ボヘミアン的とも評価しているところが愉快である。

このようにサンライズ校の特徴をまとめてみると、Jean Brodie の Marcia Blaine School とは好対照をなすことがわかる。Brodie たちの女子校の大ホールには、学校の創設者の肖像画が掲げられ、その下に聖書が置かれていて、“Oh where shall I find a virtuous woman, for her price is above rubies.”と書かれたページが開かれている。[(6)]その女子校ではキリスト教精神に則って、「有徳の女性」を育成するのを目的としていることが示されている。一方、サンライズ校の教育目的は、その学校の実質的経営者 Nina によって次のように語られる。サンライズ校は、例えて言えば「珍しい家具の仕上げ（“finish,”6）」のような教育を施す学校であり、「成金の親が学校に払った月謝の見返りとして求めているものは、子弟たちが見事なマナーを身につけることで、アスパラガスを食すときは、それを左手で持つというようなことを学ぶことだ」と、彼女は生徒たちに説明をする。(6) 浅薄な教育目標であるが、それが正に生徒の親の求めるものなのである。Nina は学校の運営を一手に引き受けて忙しい身であるが、授業のカリキュラムもひとりで作成し、授業も担当していて、彼女の授業はこの学校の教育方針をよく反映しているので、彼女の授業から検討してみたい。そこにスパークらしい痛快な教育に対する批判を読みとることができる。

Nina の授業は、社会に出てすぐに役立つ実用的なことを教える。例え

ば、国連に将来勤めたときに役に立つように、実際に長く国連に勤める経験者から得た、体験に基づく情報を教える。具体的には、国連職員としてアフリカに赴任して、象に追いかけられたときは、ジグザグに走ることにより、象の頭と尾の動きを混乱させて、その隙に逃げるというようにと。また、アスコット競馬場に将来競馬を楽しみに行く場合には、寒さ対策として暖かい下着を着込んで行くことが大切だと教えたり、現実社会を動かしているのは偽善であるなど、現実世界の主に経済活動に密着した授業を行っている。これらの授業内容は、具体的に限定された状況での極めて現実的な情報で、例えば Marcia Blaine School など従来の学校で教えてきた、倫理的理念的な内容を反映する授業とは異なり、現在の学校の授業内容の変質を映している。現代では、学問研究、人格の涵養の場であった大学までも、実用主義が蔓延っているのが実情である。スパークはサンライズ校での実用的な授業を以上のように戯画化して、今日の市場原理至上主義に躁躍された教育を諷刺している。これらの授業が小説家のフィクションであるかというと、多少の戯画化による誇張はあるだろうが、上述したように現実にフィニッシング・スクールでは、高額な月謝をとり、若い女性たちにそれに類する授業が行われている。次に、サンライズ校のもっとも力を入れているクリエイティブ・ライティングの授業を検討してみることにする。その授業により、サンライズ校は芸術的との評判を得ている。その授業は小説家志望の Rowland が担当しているが、作者のこの作品の意図を反映するのみならず、物語を展開するモチーフの役割も果たす、重要な意味を担っている。

Ⅳ

The Finishing School は、前後するが小説家志望の Rowland の Creative Writing の授業風景から始まる。この冒頭のシーンはわずか一頁ほどの短いものであるが、一挙にスパークの世界に読者を引き込む見事な出来映えであ

る。これから始まる物語のシーンの設定と、主人公による授業の内容 ――「物語のシーンの設定の方法」―― が、巧みに重複する枠組み構造になっていて、しかもこれから展開する物語の主調も読者に予測させる。それはスパークならではの簡潔にして意味深長で、その上滑稽で、その後の展開への読者の期待感を一気に高める。同時にその授業を行っている教師のクリエイティブ・ライティングの能力や、教師としての資質の有無も読者に推測させるといういくつもの役割を果たす。それと同時に、現代の教師や授業への批判――そもそもクリエイティブ・ライティングなど教えられるのか――になっているとも考えられる。詳しく Rowland の創作の授業を見てみることにする。

小説冒頭の Rowland の授業の要点は、物語のシーンの設定をする際に、いきなり “emphasis” を含めてはいけないという点である。シーンの設定は現実に基づくものであれ、想像力によるものであれ、あくまでもシーンの描写に焦点を絞るようにと教える。彼は実際に教室の窓から外を眺めて、そこから具体例を引く。サンライズ校の教室の窓の外には湖が広がっているが、その日は濃い霧で向こう岸を見ることはできない。読者は教師のシーンの書き方の解説を聞きながら、その学校が湖の畔にあることを知る。そしてその日は、濃霧が出ている天気であることも分かる。ある場面や光景の設定をするときに、その時点で書き手が「強調」を加えること、つまり書き手の主観を加えてはいけないという。彼は次のように具体例をあげる。

> “you must just write, when you set your scene, ‘the other side of the lake was hidden in mist.’ Or if you want to exercise imagination, on a day like today, you can write, “The other side of the lake was just visible.’ But as you are *setting* the scene, don’t make any emphasis as yet. It’s too soon, for instance, for you to write, ‘The other side of the lake was hidden in the fucking mist.’ That will

come later. You are setting your scene. You don't want to make a point as yet." (1－2)

向こう岸を霞ませるような濃霧でも、シーンの設定の段階では、"the fucking mist" と強調してはいけないという。強調として "fucking" という言葉を使うことには、今から半世紀も前に、*The Catcher in the Rye*（1951年）のなかで16歳の少年が、当時教育界に物議を醸し出したその言葉を多用したときとは異なり、誰ももう驚きはしない時代になった。しかしながら、写実的描写に使われると、ニュートラルな写実は一挙に書き手の品性を露見させることとなる。つまり、Rowlandの一面を読者は知ることになる。また、読者は後から振り返って分かることであるが、この教師はあるシーンの設定には、天候／気象が重要であると考えている。Rowland はシーンの設定を以上のように、クリエイティブ・ライティングの授業で教えるのであるが、この後も彼の授業が行われて、小説家志望の Rowland の小説家としての資質が、クリエイティブ・ライティングの授業を通して更に明らかになっていく。

Rowland のクリエイティブ・ライティングの授業は、その後の物語の展開を進めていく媒体の役割も果たしつつ、何度か紹介されるが、彼の授業は生徒の文章能力の向上に役立っているように思えない。また、教師の Rowland 自身がクリエイティブ・ライティングを教えながら、段々小説が書けなくなっていくのが皮肉だ。教える生徒も創作以前に、まず基本的な綴りや文法の勉強が必要な文章を書いていることが、彼らの書く手紙などから分かることになる。例えば、親にお金の無心をする、女子生徒の手紙が紹介されるが、普段喋る言葉そのままが文字になって並んでいて、句読点も満足に打たれていない有様だ。Rowland はリルケ論を大学院で書いた経歴の持ち主であり、言葉への感性は鋭いと推察される。また、彼は Mahler というロマンティックな姓を持ち、名前は詩人に相応しい名前であ

る。彼の学校はロマン派の詩人、バイロンの*Child Harold*の舞台となったシオン城の近くにあり、バイロンの詩も引用される。つまり学校の所在地が彼のロマン主義への嗜好を示しているようである。そして、学期も大詰めを迎えるころクリエイティブ・ライティングの授業で、彼は言葉の重要性を語る。ある人気歌手が「必要なのはアイディアで、言葉を扱う技術ではない」(172) と言ったことを引き合いにだし、「ヨハネの福音書」の冒頭の有名な一節を引用し、「初めに言葉ありきで、言葉がアイディアそのものである」(172) と高尚な授業を始める。

言葉の重要性をそのように説いたうえで、Thomas Hardy の "In Tenebris" を最後の授業で取り上げることにする。その詩は愛する者の喪失を深く悼む6連からなる詩で、どの連も痛切な悲しみに満ちている。Hardy の詩は死別の喪失感を、「冬の夜」、「散りゆく花弁」、「恐怖で倒れる鳥」、「凍結して枯れる葉」、「漆黒の被いとなる夜」など、自然の風物にこと寄せて愛する者の喪失の苦悩を詠う。その詩を読んだ生徒のMary Footが泣き出すと、教師は「その詩の悲しみは、われわれのものではなく、 Hardy のものだ」(174) と Mary に諭す。そして Rowland が生徒に求めたことは、 Mary のように感性を通して詩を味わうことではなく、その詩の一行 "Birds faint in dread" を取り上げ、彼はこの一行はおかしい、とその箇所だけがこの悲しみに満ちた詩で気になる様子だ。彼は「Hardy は何が言いたかったのか、鳥が恐怖で失神するだろうか？」と生徒にその答えを求める宿題をだすのだが、「Hardy は田舎の人なので、答えを知っているかもしれない」(174) と補足する。 確かにそう尋ねられれば、Hardy の "In Tenebris" が伝える愛する者の死の悲しみは、俄に滑稽に思えるその一行で、調子が外れてしまうのだが、スパークは例によって登場人物に対する彼女の思いを一切語らないので、 Rowland の Hardy の詩に対する態度も、実は良く私には分からない。つまり、Rowland は Hardy の詩の手法を "pathetic fallacy" の例として批判しているのか、作者が詩にリアリズムを適用する Rowland を嘲笑してい

るのか不明である。もし、“pathetic fallacy” を誇張として批判しているならば、殆どのロマン派の詩は受け入れられないことになるので、彼がリルケの研究者であることが矛盾したことになる。しかしスパークの作品を読んできた者には、彼女自身は、「鳥が恐怖で失神する」という一文を可笑しく思っていると想像できる。例えば彼女は、文学というものは “ridicule” を最大の武器とすべきだと語っていて、その同じスピーチのなかで “The art of pathos is pathetic, simply; and it has reached a point of exhaustion, a point where not the subject matter…”(7) と語り、芸術家が感傷的になってもそれだけで終わりで、骨の髄に届くようなことは語れないと述べている。

詩の鑑賞にリアリスティックな Rowland を揶揄しているかと思うと、その一方で上述した彼の「アイディア」に関する考え方は、スパーク自身のものと一致する。スパークは彼女のエッセイのなかで、小説家が「アイディア」を競うことが、不思議でならないという趣旨のことを述べている。(8)彼女にとって、「アイディア」とは「貨幣のように皆の共有するもの」で、特定の個人に所属するものではない。従って、「誰々の考え」という表現が、スパークには異常に思えると語る。「アイディア」とはちょうど人々が共有する言葉と同じで、個人に帰属するものではない。小説家の手腕は特殊な考えを披瀝することではなく、ある「アイディア」をいかに表現するかという点にあると考えている。問題となるのは、「アイディア」の的確な表現を可能にする「技術」なのである。従って、 Rowland の「言葉」や「アイディア」に関する考え方は、詩を文学の最高の形式と考えるスパークのものを代弁しているように思えるのだが、彼の Hardy の詩の授業は、既にみたように、滑稽で核心を外しているとも考えられる。言葉の象徴的機能がもっとも発揮される詩の授業で、彼は突然リアリスティックな言葉の解釈にこだわるからだ。詩の比喩表現が、ある一定の比喩の許容範囲を超えると、滑稽感が生じてしまうということは確かにありえるだろうが。

しかしながら、彼は別のクリエイティブ・ライティングの授業で、文章の精神分析的解釈を説明し、フロイト的に考えると「猫が母親を意味することがある」(78) と具体例をあげている。この「猫の例」も Hardy の「鳥の例」のどちらもリアリズムの解釈では、ありえないと考えられる。問題は、教師が“In Tenebris”の詩に自然な共感を示した生徒の感受性を、まず受け止めなかったという点ではないだろうか。Rowland はどのようにリルケの詩を研究したのであろうか。詩をまず感性を通して味わずして、研究できるとは思えない。しかしながら、矛盾するようではあるが上述したように、若干スパーク自身も Hardy の詩のなかの表現に、現代人にはそぐわない一面を感じ取っていると思う。その違和感は、作品の最後に流れる天気予報士のありふれた予報の言葉が、意外にも醸し出す詩的な余韻と対比されることにより、詩的表現の時代の変遷に伴う変化を、現代人の私たちに感じさせる。同時にそのありふれた言葉の組み合わせは、言葉や考えそのものが詩的なのではないことを、見事に示している。

Hardy の詩の一節に関する Rowland のおかしな質問は、次週の最後の授業の宿題となる。最後の授業は予想外な破天荒の出来事が起き、残念ながら休講になり、“In Tenebris”の授業は結局行われないまま学期が終わり、彼の説明を聞けないのは残念である。そのために彼の質問の真意が不明のままで終わってしまうことになる。その椿事とは、クリエイティブ・ライティングの授業が予定されている日の朝、Rowland が風呂に入っているところに、自分の出版社を横取りされると心配した教え子 Chris が風呂に押し入り、今までになく怒りで興奮して、電気ストーブをバスタブに横たわる Rowland に投げつけたのだった。Brodie は教え子 Sandy によって学校当局に、生徒の死の原因が Brodie であると告げ口され職場を追われが、Rowland は教え子の Chris により感電死させられるところであった。自分を踏み台にして、先生が小説を先に出版すると激怒したのである。Chris の小説よりむしろ、彼の赤毛に関心を示した出版社の女性編集者が、Rowland に関

心を持ち、その結果彼の学校観察録 *The School Observed* は出版されることになる。その内容は彼のクリエイティブな能力からすると明らかなように、とても小説と呼べるようなものではないと思われる。

Rowland が出版しようとしていた小説とは、どのようなものかみてみよう。既に彼のクリエイティブ・ライティングの授業から推量ると、彼によい創作文、小説が書けるとは思えないが、彼自身は行き詰まりは作家によくある “a writer’s block”（49）（作家のスランプ）と思っている。しかし、彼の小説家としての能力の問題以外に、彼自身が気付かないうちに、自分より楽々と小説を書き進めている教え子 Chris と彼の進行中の作品への嫉妬が、原因だということが徐々に明らかになってくる。Chris に殺意まで感じるようになり、Nina の恋人の勧めで修道院に静養のため入ることになる。彼が書けない原因を突き止めるのは妻の Nina である。彼のオブセッションになってしまった Chris に関して、何でも思いつくまま見たままをノートに取ることを勧める。それはまさに、彼自身が創作文の授業で書きあぐねている学生に与えるアドヴァイスであるのが、皮肉だ。

> 「細部を観察すること。観察して考えよ。観察したことは事実でなくてもよい。文字通りの真実は、退屈なもの。主題を分析し、フロイトの意味するリアリティに至るように。全てのことは、見えているものとは異なる側面がある。」（77）

現実を観察して記録し、その記録の背後に隠れた意味を分析することを、Rowland は彼の受講者に勧めているのだが、これはスパーク自身の考えとは異なるようだ。彼女は前作 *Aiding and Abetting* において、フロイトを創始者とする精神分析の今日の隆盛を戯画化して、諷刺している。その作品のなかに登場するパリで高額な診療費を稼ぐ精神分析医 Hildegard は実は偽名で、別の人間（ダブル）として新しい人生を享受しているが、その名を

Beate Pappenheim といい、自らを “the stigmatic of Munich”（「ミュンヘンの聖痕の聖女」）[9] と僭称し、寄付で荒稼ぎした詐欺で指名手配中の身である。手の込んだことに、Pappenheim という名は実在の女性の名でもあり、患者として19世紀のヒステリー研究の発端となった Bertha Pappenheim を連想させる。彼女も Anna O という別名（ダブル）を持ち、フロイトの精神分析理論を生み出す契機となった女性といわれている。Pappenheim という実名の彼女は、フェミニズムの草分け的存在である。フロイトの精神分析理論の分野では、その名をよく知られているという女性の名前を、登場人物に使用し、その女性に宗教を悪用した詐欺をさせ、悩める人々から、金を巻きあげる。罪が暴かれると名前を偽造して、今を時めく精神分析医に変身させ、また悩める人から治療費を荒稼ぎさせるというこの入念な設定は、フロイトの精神分析への不信感が背景にあると感じさせるものである。

スパーク自身はフロイトと対照的に、一貫して登場人物の内面を深く掘り下げるような人物造形を、スタイルとして敢えて避けてきたような小説家である。彼女の登場人物との距離の取り方は、時には作家が登場人物を疎外しているように見えるほどである。その結果登場人物はくっきりとした線で輪郭が描かれるが、内面については多くは語られない。従って、登場人物を精神分析的に掘り下げるようなことは当然しない。それに反して、 Rowland は彼の創作の授業の内容からすると、フロイト的アプローチを文学の理解に援用するのを勧めている。重複するが、フロイト的解釈に立つと、彼は「猫が母親であることもある」（“The cat means the mother.”78）と、具体例をあげている。その一方で前述したように、Thomas Hardy の詩の一節 “Birds faint in dread” に関しては、リアリズム的解釈を持ち出して生徒を悩ませる。作者はこの点に関して、これ以外の解釈の手掛かりを与えていないと考えられるので、この矛盾自体が Rowland の小説家としての未熟さを示していると考えるのが自然ではないだろうか。

小説の起源がリアリズムにあるとすると、リアリズムと詩的想像力による比喩表現や非現実的表現などの関係は、いつの時代の小説家にとっても根源的な問題ではある。スパーク自身その問題が最初の小説を執筆するときの最大の悩みだったことが、*The Comforters* の Caroline の小説執筆に関する苦悩を通して推察できる。Rowland の場合は、上述した彼の授業内容の矛盾から判断して、Caroline のようにその問題と真剣に向き合っていないようであり、確固とした彼自身の小説観をまだ獲得していないと判断してよいのではないだろうか。サンライズ校の宣伝のため、彼が担当するクリエイティブ・ライティングの授業のシラバスを用意する。それを読んだ生徒 Chris は魅力的な説明文と思うが、それが他の文学フェスティバルで使用された文言の剽窃であるとことに気付く。一途に小説家になりたいと望む Rowland ではあるが、文章の書き手としてもっとも恥ずべき行為である他人の文章の剽窃をし、それを生徒に発見される恥をかくだけではなく、そのことにより Chris は Rowland を嫌悪するのではなく、逆に親しみを彼に感じ、保護者的気分を味わう。立場や年齢が逆転してしまう。つまり、生徒が教師に対し優位に立つ転倒した関係が二人の間で成立する。

V

では、生徒の Chris とはどんな人物か、Rowland との関係を通して考えてみたい。上述したように *Aiding and Abetting* の登場人物 Beate Pappenheim の名前に意味があるように、スパークは今まで描いてきた多くの登場人物に、特別な意味を込めた名前を与えている。彼女自身自伝のなかで、次のように名前へのこだわりを明らかにしている。“Details fascinate me. I love to pile up details. They create an atmosphere. Names, too, have a magic, be they never so humble.”(10)　作者はどのような意図で、Rowland を悩ませる生徒に Chris Wiley という名を与えたのであろうか。まず最初に気がつくのは、Chris は男性にも女性にも使われる名前であるという点である。これは彼のセク

シャリティの曖昧性を示してはいないだろうか。妻の Nina は夫の自分への関心が薄れて行く実感から、 Chris に惹かれていく夫がゲイではないかと心配になる。次に姓の Wiley であるが、“wile” には「策略、狡猾さ」といった意味がある。「狡猾なクリス」とは気の毒な名前ではある。Rowland の姓が Mahler と、ロマンティックな印象を与えるのと比較すると、生徒の Chris の方が教師の Rowland より一枚上手という感じが、二人の名前から感じられる。ボヘミアン的な Rowland と狡猾な Chris では、どちらが先に小説を世に出すことができるかという点も、ひとつの物語の焦点となる。

この二人 Rowland Mahler と Chris Wiley の関係は、なかなか複雑である。小説＝芸術を介して結びついた二人の男性ということから連想するのは、Henry James の最初の長編小説 *Roderick Hudson*（1875年）に登場する同じく二人の男性、Rowland Mallet と Roderick Hudson である。サンライズ校でも最初の年に、“Henry James and the European scene” という特別講義が専門家を招いて行われたという。(50) それは Rowland ではなく、妻によって計画されたのであるが。Rowland Mahler は James の Rowland と姓は異なるが、興味深いことに二人は同じ頭文字 R.M. を持つ。スパークは Henry　James の芸術家小説 *Roderick Hudson* のなかの二人の男性主人公を意識して、Rowland と Chris を描いたのではないだろうか。 Roderick Hudson は、典型的な “romantic artist” として描かれている。芸術家の才能を秘めていそうであるが、アメリカのピューリタニズムの影響が色濃く残るニューイングランドで、芸術家として大成することは容易なことではない。一方 Rowland Mallet は厳しいピューリタンの父親の影響で、芸術家になることは諦めるが、青年 Roderick に自分自身の芸術家への夢を託し、芸術家にすべくイタリアに連れて行き、彼自身は後見人役に徹する。結局文化の爛熟するヨーロッパで、 Roderick は Rowland の夢を果たすことなく、若くして身の破滅に至る悲劇でふたりの男性の関係は終わる。芸術も恋人も失った Roderick が、投身自殺を遂げる山は、スイスのアルプスで、ロマンティック・ヒーロー

の最期には相応しい設定であるが、サンライズ校もフランス・アルプスを望む景勝の地にある。アメリカの東部、ピューリタンの影響が強く残る土地で、彫刻家として生きることの難しさに直面する青年の精神的苦悩は、エジンバラのピューリタン的雰囲気を嫌い、早期の脱出を願い生涯異国で過ごし、イタリアの小さな村を終の住処にしたスパーク自身にとって、まさに彼女自身が直面した問題だったと言える。(11)

James の Rowland が、Mallet（槌）というピューリタンの厳格さを暗示する姓を持つのに対して、スパークの Rowland の姓は、ボヘミア生まれで、ロマン派最後の世代に属す作曲家 Gustav Mahler と同じ姓であり、ロマンティック・ヒーローとして相応しい名前に思える。このことから推測できるように、スパークの Rowland は、生徒 Chris を育てる教師という James の Rowland の役割を共有する一方で、自ら小説家になる願望を持つ点では、James の Roderick の要素も併せ持つと考えられる。Henry James の小説では、Roderick の目鼻立ちは、彫刻家が鑿で彫ったようにハンサムで、体躯及び顔の幅が際立って細いという特徴が強調されている。(12) それは彼の芸術家としての繊細さを示しているように思われるのだが、スパークの方では、同じく顔の幅が細いと言及されるのは Rowland の顔の方で、“blade-like”（48）のようにシャープな顔つきをしていると描写されている。それとは対照的に、James の Rowland の顔は、彼の円満な人格を反映するかのように、全体にぽっちゃりした体型と呼応して、ふくよかな幅の広い顔と形容されている。

Roderick を一流の芸術家に育てることにより、自ら果たせない芸術家になる夢を代理体験しようとする Rowland Mallet とは異なり、Rowland Mahler は自ら小説家志望で、大した苦悩もなく小説を書き綴る Chris とその作品に、激しい関心と嫉妬を抱くことになる。以上のようにスパークの作品中の、小説＝芸術を介しての二人の男性の関係は、James の同じく芸術家に

なる夢を抱く二人の男性の関係を連想させつつも、喜劇的に換骨奪胎され利用されていると考えられる。Rowland Mahler は、自身が小説家になりたいのであり、風貌もそれらしくはある。しかし結局彼が書くものは、学校を舞台とした身辺雑記でしかない。名前と容貌は芸術家風ではあるが、彼の経験する「苦悩」は芸術＝小説に関するものではない。スパーク自身は彼女の自伝 *Curriculum Vitae* で、「“a creative writer” への道のりを記したかった」(13) と自伝執筆の目的を端的に表しているが、Rowland の場合は “creative writing” のクラスを受け持ちながら、彼自身は “a creative writer” になり損なった過程が描かれている。

Ⅵ

Rowland と Roderick の物語は、倫理的に厳格な土地から、成熟する文化の地を求め、そこで一流の彫刻家になるべく全人生を賭けながら、道徳的に腐敗して死に至る悲劇で終わり、それはロマンティック・ヒーローならではのものだ。その物語に比較すると、Rowland と Chris の物語は、ロマンティック・ヒーローの物語の展開から脱線し、そのパロディーとなっている。 James の小説では、芸術のみならず人間の倫理の問題が重要なテーマとなっているし、 Brodie と Sandy の物語でも、宗教的／倫理的問題が重要な役割を果たしているが、サンライズ校の二人の主人公には、倫理的道徳的な葛藤は見当たらない。(14) 教師の Rowland は他人の文章の剽窃をしたり、嫉妬に駆られて生徒 Chris の小説の進み具合を探るべく、彼の手荷物をこっそり覗いたり、小説家／教師にあるまじき行動をとるような人物である。若い Chris にしても、年齢に相応しい悩みもなく、大人を食った自信過剰な傾向がある。彼はスコットランド女王メアリーの秘書が殺された史実を、彼女の夫の嫉妬による殺害と読み直し小説に仕立てようとしている。彼は過去の実在の人物でも、彼の裁量で自由に動かし、物語をつくることに何の苦労もしていないが、 Rowland はそれが不思議でならない。彼は自

分の物語に巻き込まれていく苦しみを感じているが、それはスパークの最初の小説家 Caroline の直面した苦しみと同じものである。しかしながら、自信満々な Chris も自分の描こうとしている「嫉妬と情熱」の物語に、知らず知らず自ら巻き込まれて行くことになる。

このように自信家の Chris ではあったが、Rowland が修道院に入ってしまうと、彼は先生が自分にとっていかに必要か初めて理解し、一緒に過ごすために修道院に乗り込む。結局二人は自己のセクシャリティの実態を確認し、婚約してサンライズ校を二人で運営して行くことになるのだが、この収まり方も極めて現代的である。表向きは性に関するゴシップがないと言われてきたサンライズ校であるが、先生と生徒の間で、伝統的なジェンダーの壁は軽々と超えられていく。他にも世間の評判とは裏腹に、学校の庭師兼用務員の男性と女子生徒の間に子供が生まれるが、学校を卒業すると妊娠中の女子学生の方は困った様子は全くなく、妊婦のモデルの職を見つける。生まれた子供は親が王族ということで、婚外結婚で生まれた赤ん坊の処理に慣れていて、問題は起きなかったという。芸術的、人間的に廃退した果てに、絶望して死を選ぶ Roderick Hudson のようなロマンティック・ヒーローの悲劇的世界は、現代に至りすっかり消失し、スパークが語るように、教師と生徒の関係や小説の芸術としての価値や出版事情の変貌は、茶化して皮肉る “ridicule”(15) でしか表すことはできない類いのものになってしまったといえる。

念願通りふたりの作品は出版されるが、Rowland の作品は小説というより、自分の学校についての安易な体験談と平凡な随筆を混合させた身辺録であるし、Chris の本の出版社の女性編集長が、Rowland に個人的な関心を持った結果出版されたに過ぎないような代物だ。また、Chris のスコットランドのメアリー女王に関する史実を素材にした小説にしても、高く評価されたとはいえ、また「嫉妬と情熱」の物語として、史実を自由に改変創作

したと彼は自負しているが、ヴァイオリニストの知り合いの女性は事も無げに、既にドニゼッティがそっくり同じ主題でオペラにしているという。つまりスコットランド女王の物語は、既に読み切れないほど小説化されている上に、Chris の斬新と思われた実在の人物のドラマの読み直しも、独創性がないことが分かる。彼が若干17歳で魅力的な赤毛をしているという、小説の本質とは全く関係ない要素で売れたことが仄めかされる。これらふたりの小説家志望の男性の本の内容やそれらが出版された経緯は、現代の出版事情を反映していると思われる。小説の内容や小説家の資質よりも、小説家個人の特殊な要素、若いとか赤毛だとか、非本質的要素が本の売れ具合を左右する時代になったということだ。半世紀以上に亘って滑稽（comic）ではあるが、真剣な（serious）小説を書き続けてきたスパークにとって、このような事態は極めて不本意なものだったと考えられる。Rowland と Chris の二人は、James の二人 Rowland と Roderick と比較されることにより、芸術や倫理観の価値や質の低下がよく理解できる。現代は、大した小説技術なくして、誰でも小説や本を出版することができ、またそれを可能にする読み手にも問題がある、とスパークは滑稽感と共に批判していると思われる。この例こそが、見事な批判精神による “ridicule”（嘲笑）の見本である。

Ⅶ

Rowland と Chris の物語は、半世紀に及ぶ作家生活を通して常にジャーナリスティックな関心をもち、鋭い目で時代を読んできたスパークによって、現代の諸相を映し出す合わせ鏡の役割を果たしていることが分かる。教師と生徒、小説執筆と出版、妻と夫という従来の結婚形式と同性愛といったテーマが展開され、スパークの批判の対象とされているが、それらを緊密に繋いでいくのが、「天気／気象」のモチーフである。小説の冒頭のシーン、Rowland のクリエイティブ・ライティングの授業は、既に見たよ

うに、シーンの設定の仕方を教えるものであるが、そのシーンには天候の描写が含まれていた。生徒の Chris はその教えだけはよく守っているようで、自分の小説の創作に利用している。Nina は将来天気予報士になるかもしれない生徒のために、気象学の授業を受け持つ。フィニッシング・スクールで教える教科としては、少々異質な感じがするが、これも全編を繋ぐ「天候／気象」のモチーフの一貫と考えられる。物語の最後のシーンも「天候／気象」の言及で終わる。 Nina はよくスカイ・ニューズの天気予報を聞く習慣があるようで、再婚してサンライズ校を離れ、久しぶりに仕事でスイスに戻ったおり学校を訪れて、若者の声と同時に馴染みのスカイ・ニューズの天気予報士による予報を耳にする。「今夕から夜半にかけて…」（“As we go through this evening and into tonight…”）（181）といつものように予報する聞き慣れた言葉に、懐かしさを感じるシーンで、ふたりの男性教師と生徒の物語は終わる。女性教師 Brodie と生徒 Sandy の物語が裏切りに終わり、ふたりの女性の物語が悲劇的な印象を残すのに対し、男性教師と生徒のふたりの男性の物語の読後感は大いに異なる。「今夕から夜半にかけて…」という一節は、天気予報でしばしば使われる常套句であり、詩的な表現とはいえないが、最後のシーンで、Nina の感情を通して読者の耳に届けられることにより、詩的な余韻を感じさせる。 *The Prime of Miss Jean Brodie* の最後は、今は亡き Jean Brodie の強烈な個性が強い印象として残るが、*The Finishing School* の方は、人間を取り巻く大きな自然の存在が、刻々と変化する天候によって意識され、人間の存在は小さく霞んでいく。

濃霧のシーンから始まった、コミカルでシリアスなこの物語は、多くのスパークの物語の最後のシーンと異なり、人間の運命を掌握する全権者の存在が前景化される厳しさはなく、過ぎた一日に名残惜しさを感じさせながら暮れて行く、穏やかな夏の一日を連想させる。そして漆黒の夜がサンライズ校にも訪れるのであろうが、その学校は人間の喜劇を繰り返しながらその名の通り、また、新しい一日（ As we go through this evening and into

night... The sun rises.）を迎えることになるだろう。人間の「嫉妬と情熱」のドラマは、スコットランド女王メアリーの時代も、Rowland と Chris が生きる現代にも相変わらず存在し、ふたりはまさにその「嫉妬と情熱」のドラマの登場人物になってしまった。一方自然はそれらの人間のドラマに関係なく、夜明けと日没を繰り返しながら時は過ぎていく。人間のドラマのプロットを空の高みから創造する全能の作者の厳しい存在は、最後の作品では強調されることはない。1996年の作品 *Reality and Dreams* では、作中引用される T.S. エリオットの「J. アルフレッド・プルーフロックの恋歌」が、中年男の主人公個人の内面世界のみならず、夕暮れを思わせる現代という時代そのものを、霧のメタファーで暗示している。同様に、サンライズ校の物語も霧のシーンで始まり、夕暮れの帳が降りて終わる。一日の終わりを迎える夕暮れの静けさが、“As we go through this evening and into tonight...” という何の飾り気もない天気予報の一節のなかに、詩歌の一節のごとくペイソスを込めて現代の読者の耳に感じられる。平凡な言葉を選び、このように終わりの感覚をペイソスと共に伝えることのできる能力は、自らを本質的には詩人とみなしていたスパークの面目躍如たる所以である。前述した Hardy の感傷的虚偽を意識させる “Birds faint in dread” の一節とは、見事な対照をなしている。タイトルの “the finishing school” とは、Rowland たちの学校であると同時に、どの文学理論の範疇にも属さないと考えていたスパーク自身のことを意味しているのかもしれない。ひとりで構成する文学の独自の流派、「スパークという流派（the Sparkian School）」は、この作品 *The Finishing School* で終わる、という作者のメッセージ—— “the finishing school” =「終わりとなる流派」——が込められていると想像すると、最後のシーンの叙情性は更に深いものに感じられる。

注

1　Muriel Spark. *The Finishing School*. New York: Doubleday, 2004. 以下、この作品

の引用はすべてこの版により、頁数だけを本文中の括弧内に示す。

2 David S. Robb. *Scotnotes Number 7: Muriel Spark's The Prime of Miss Jean Brodie*. Glasgow: Association for Scottish Literary Studies, 2004. 46–7. Robb によるこの作品の解説書である本書は、薄いものであるが、スパークのもっとも人気のあるこの作品の基本的情報や解釈を手際よく紹介するものである。スコットランドのことを熟知した解説者により、基本的な解説書でありながら、見落としがちな情報や視点を紹介されている。そのひとつの例が、この小説を英国の伝統的な "school story" として楽しむ読み方である。

3 Muriel Spark. *The Prime of Miss Jean Brodie*. London: Penguin, 1987. 以下、この作品の引用はすべてこの版により、頁数だけを本文中の括弧内に示す。

4 5th Sept. 2006. Good Shepherd Finishing School<http://www.gsfs.ac.in/>

5 5th Sept. 2006. Sirval Mont–Fleuri<http://www.surval.ch/introduction_en.html>

6 『聖書』新共同訳。「箴言31章10節」日本聖書協会、1991年、1033頁。

7 Muriel Spark. "The Desegregation of Art." *Critical Essays on MURIEL SPARK*. Joseph Hynes ed. New York: G.K. Hall & Co., 1992. 36.

8 _____, "My Conversion." *Critical Essays on MURIEL SPARK*. Joseph Hynes ed. New York: G.K. Hall & Co., 1992. 28.

9 Muriel Spark. *Curriculum Vitae*. London: Constable, 1992. 11.

10 _____. *Aiding and Abetting*. London: Viking, 2000. 23.

11 Muriel Spark. "Edinburgh–born." *Critical Essays on MURIEL SPARK*. Joseph Hynes ed. New York: G.K. Hall & Co., 1992. 21–23.

12 Henry James. *Roderick Hudson*. London: Penguin, 1987. 12.

13 Muriel Spark. *Curriculum Vitae*. London: Constable, 1992. 14.

14 *The Prime of Miss Jean Brodie* の軽視されがちな宗教性は、以下の二書に詳しい。 David S. Robb. David S. Robb. "Religion in the Novel." *Scotnotes Number 7: Muriel Spark's The Prime of Miss Jean Brodie*. Glasgow: Association for Scottish Literary Studies. 2004. 25–33. David Lodge. "The Uses and Abuses of Omniscience: Method and Meaning in Muriel Spark's *The Prime of Miss Jean Brodid*." *The Novelist at the Crossroads*. London: Ark, 1986.135–142.

15 Muriel Spark. "The Desegregation of Art." *Critical Essays on MURIEL SPARK*. Joseph Hynes ed. New York: G.K. Hall & Co., 1992. 33–37. 現代作家に残された唯一の闘う武器は"ridicule"だとの主張は、現代を生きる者にとり説得力あるものである。それを可能にするのは、現実を直視する強靭な知性であるとスパーク

は考えている。

参照文献

James, Henry. *Roderick Hudson*. London: Penguin, 1987.

Spark, Muriel. *The Prime of Miss Jean Brodie*. London: Penguin, 1987.

_____. *Reality and Dreams*. London: Constable, 1996.

_____. *Aiding and Abetting*. London: Viking, 2000.

Waugh, Evelyn. *Black Mischief*. New York: Back Bay Books, 2002.